令和3年度　学校関係者評価書

鈴鹿市立加佐登小学校

【学校教育目標】思いやりをもち，自ら考え，自ら判断し，意欲的に取り組む子の育成

【めざす学校像】安心して過ごせる学校「毎日が楽しく，明日が待たれる学校」

評価項目	本年度の教育活動の目標と評価のための具体的な指標	達成状況	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
（1）主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくり	**「分かる喜び」「学ぶ楽しさ」を実現する授業づくり**（研修部会）谷口・三村 【目標】考えを交流し，学びを深める授業づくり 【指標】提案授業を年6回（全体3回，学年部3回）入れる。授業公開を全職員が1回は行う。自主研修会を定期的に行う。各学年で，算数クイズの掲示を作成する。職員アンケート2において，肯定的な回答が80%以上。	A	○校内研修が負担にならないよう計画的に進めることができた。 ○必要に応じて自主研修会を行い，国語などの教科にも積極的に取り組んだ。研修の副題が「ICT機器を用いた授業づくり」だったので，ICT機器の使用方法の自主研修会を多く企画した。自主参加にもかかわらず毎回多くの職員が出席しスキルアップの機会となった。 ○自主研修会では講師役を研修長やICT支援員だけでなく，その分野の得意な先生が講師となり，みんなで高め合っていくことができた。職員アンケート２において，肯定的な回答は８５．７%。	・新型コロナとＩＣＴの導入が同時期で，当初は先生はたいへんだったと思うが，授業を参観した際，児童も端末を使った授業に馴染んでおり，スムーズに進められていると感じる。（多数） ・自主研修会及び提案授業の成果が出て教師の満足度も高くてよい。（複数）	・ICT機器を用いた授業に教師も子どもたちも慣れてきている。今後は，ICT機器を用いた主体的・対話的で深い学びのある授業はどういうものか突き詰めていきたい。 ・来年度も計画的に自主研修会をもちたい。そこでは，いろんな先生が講師となり，それぞれの先生の知識や実践をみんなで共有し合っていきたい。
	新学習指導要領に即した授業改善（研修部会）谷口・三村 【目標】主体的・対話的な学びのある授業づくり 【指標】授業の中で，自分の考えを書いたり話したりする機会を意図的に設けていく。ペア・グループの活用，全体で考えを練り上げ授業の取り組みを進めていく。児童アンケート1,2において，肯定的な回答「はい」「どちらかといえばはい」が80%以上。	B	○児童アンケート１「授業で自分の考えを積極的に発表したり，仲間の意見から新しい考えを取り入れようとしていますか。」では２学年が８０%以上を達成。（１学年は７０%。）児童アンケート２「意見を発表したり書いたりする時に，うまく伝わるように工夫していますか。」では，８０パーセント以上達成は２学年。（１学年は７９%）意識的にペアやグループの活用を図り，それを全体での練り上げにつなげるよう発問することで，対話的な授業への改善が図られている。 ▲オンライン授業が入ったことで進度を優先したり，コロナ感染防止のため，時期によってはペア・グループ学習の回数に制限をつけねばならなかった。	・学習内容に応じたグループ化等工夫しており，児童が自由また積極的に発言できる雰囲気がある。（多数） ・先生の指示で素早くグループ作りをしたり，先生と児童が話をしたりと話し合いの際は活発に意見交流をしつつ，テーマを理解して話し合っていた。 ・聞く態度もよい。	・今後も課題に対して，各自で自分の考えを持つ→ペアやグループで教えあう（話し合う）→全体で練りあうといった授業の流れを意識し，各教科の中で取り組んでいきたい。 ・認め合えるクラスづくりを進めつつ，自分の考えを持ちにくい児童への励ましや支援も考えていきたい。
	教育ＩＣＴの日常化（ＩＣＴ担当）谷口・澤村・野村 【目標】ＩＣＴ機器を使用した授業づくり 【指標】ＩＣＴ支援員さんを積極的に活用する。また，週3回以上はクロームブックやプロジェクター等を授業の中でも使っていく。全体研修会や自主研修会を定期的に行い，職員のICT活用指導力の向上を図る。職員アンケート3において，肯定的な回答が80%以上。	B	主に，自主研修会の中でICT機器の使用方法について研修を進めた。 ○1学期は，オンライン授業を想定して，全ての学年で練習を行った。また，保護者にも呼びかけて体験会を行ったため，9月からのオンライン授業では大きなトラブルもなく行うことができた。 ○通常の授業の中でも，ICT機器を使用した授業をすることは多くなった。 ▲これからの課題として，ICT機器を何のために使用するのか，効果的な使用方法であったかという点について，今後検討をしていく必要がある。 ▲ICT支援員を活用した授業は，計画的にまた系統的に活用することができなかった。職員アンケート３において，肯定的な回答は78.6%であった。	・1学期ＩＣＴ機器を使用した授業を多く取り入れたことで9月のオンライン授業にスムーズに対応できた。 ・ＩＣＴ機器で音や映像，動きのある教材を効果的に使い，めざましい進歩があった。（多数） ・新しい教材開発が進んでいる中，教育現場での活用法の絞り込みも必要だが，限られた授業時間の中で，先進的な事例だけでなく実績のある方法も大切にしており，期待がもてる取組がなされている。 ・オンライン授業は低学年は保護者がつきっきりだったという話も聞いた。保護者の協力あってのオンライン授業である。 ・実際にどのように子どもたちがＩＣＴ機器を活用しているのか保護者に周知したり，体験会を継続したりしてほしい ・視力への影響はないか。 ・ＩＣＴを利用した教材はパッケージ化されていて画一的で，先生の創意工夫がしにくくはないか。	・来年度からは，長期休み期間だけでなく，普段の日でも端末を家に子どもたちが持ち帰る予定である。どのように端末を使って家庭学習を進めていくのか考える必要がある。また，保護者にも協力をお願いしながら，共にICT教育を進めていきたい。特に，健康面に注意し，学校と家庭における使い方のルールを整備していきたい。 ・ICT機器を使った学習の良さと従来の学習の良さを見極めていく必要ある。他府県や他市の先行事例を参考に，効果的な使用方法を模索していく。 ・ICT機器を使った教材は，「チーム加佐登」のフォルダで，どの先生も使いやすいように管理していく。先生の実践や教材をそのフォルダに毎年積み重ねていく。
（2）互いを尊重し，安心できる人間関係づくり	**図書館教育の充実**（図書館教育担当）大世古・藤見 【目標】豊かな心を育む読書活動の推進 【指標】図書委員による図書館祭りを年2回実施，教員による読み聞かせ「お話ﾌﾞﾚｾﾞﾝﾄ」を年3回実施する。主に1～4年で，朝の読み聞かせを年15回以上実施する。巡回指導員によるﾌﾞｯｸﾄｰｸを各学年で1回以上実施する。テーマに沿ったコーナーを定期的に図書室に設置する。その結果として，平均貸出冊数を年間で低学年30冊以上、高学年20冊以上とする。児童アンケート4において肯定的な回答が80%以上。	B	○１回目の図書館まつりは（６月）は開催できた。２回目は２月上旬に実施予定。６月の図書館まつりでは，図書クイズを行い，来客数が増えた。 ○「お話プレゼント」を，年３回実施。朝の読み聞かせでは，コロナウイルス感染症防止のため，１学期はボランティアが入ることが難しかったので，各担任が子どもたちに読み聞かせを行った。 ○巡回指導員を活用し，各学年でブックトークを行ったり，テーマに沿ったコーナーを定期的に図書室に設置したりすることができた。 ○貸出冊数は，低学年・高学年共に達成できた。 ▲児童アンケート４においての肯定的な回答が42.3%と目標の80%には大きく及ばなかった。今年度は子どもたちのICTの活用能力が向上し，調べ学習等をインターネットですることが多く，以前より図書室を活用する機会が減った。	・よみきかせは子どもの情操教育にとてもよい。コロナの対応はたいへんであるが読書への取り組みを継続してほしい。 ・図書館の利用促進のためのイベントを企画したり，児童が楽しんで本に親しむ工夫をしたりしていてよい。今後コロナでなくても，本での調べものや情報収集は減っていくことが予想されるので取り組みを継続していくとよい。（多数）	・読み聞かせは，来年度も読み聞かせボランティアや担任による読み聞かせを続けていきたい。 ・図書館利用促進のための取り組みを，今年度同様に行っていきたい。
	人権を尊重する態度の育成（人権教育担当）井村 【目標】自尊感情を高め相手のことを思いやれる心の育成 【指標】毎月「人権の日」を設定し，人権について自分を見つめる機会を設ける。また，人権の授業を各クラスで月1回以上行う。児童アンケート５，６，７，１０，１４で肯定的な回答80%以上。教職員の人権意識を高めるための研修を行う。年間3回以上。	B	○各学年で計画を立て，定期的に人権学習を行った。 ○人権教育だよりを年に４回発行し，保護者に人権学習について知らせたり，人権教育の啓発を行ったりした。今年度は「ピンクシャツを作ろう」という若手教員の発案のもと，加佐登小学校オリジナルのピンクシャツを作った。教員の中での人権教育への意識も高まっていると思われる。 ○人権授業の公開・検討，学級経営を振り返る人権レポート研修会と，年４回人権教育にかかる研修会を行い，全教職員で研修を深めた。 ○児童アンケートでは，５，６，７，１０については，おおむね８０%を超えている。 ▲児童アンケート１４では，５５%～７６%と低くなっており，自分によいところがあると思えない，自己肯定感の低い様子がわかる。自分の人権も，他者の人権とともに大切にできるように，児童の自己肯定感を高める取組を引き続き行っていく必要がある。	・ＬＧＢＴ，障がいなど様々なテーマがドラマなどに取り入れられており，人権意識の拡大，多様性に気付かされるようになっている。児童一人ひとりがより良い社会の一員となるよう人権意識を織り込んだ企画がなされている。 ・人権の日にピンク色を身につける意識を子どもたちに持たせることにより人権についてより意識が高まっている。（多数） ・ピンクシャツを作ってどれくらいの人が着用しているか。あまり見ない。ＰＴＡにも勧めてはどうか。 ・ピンクシャツ運動の取り組みを継続することで，自己を見つめる機会も増える。 ・自己存在感や達成感を持たせる支援を工夫していくとよい。（多数） ・家庭と連携をとり人権感覚を引き続き高めていってほしい。	・児童がよりよい社会の一員となれるように，様々な人権問題を知り考える人権学習に，これからも取り組んでいく。授業を計画する際，多様な人権問題を学べるように，教師も意識していきたい。 ・人権の日の人権学習，ピンクシャツ運動にこれからも教師一丸となって取り組んでいく。PTAの分もピンクシャツを作るのは，サイズの確認，発注など，担当教員の負担が大きいので，PTAでTシャツを作るときがあれば，ピンクを意識して作っていただけるとありがたい。 ・学校は勉強する場所なので，学習が苦手な児童の自己肯定感が下がりやすいと思われる。「努力して少しずつ力をつけた過程を認め褒める」，「スモールステップで，がんばりを認めていく」ことを，学校と家庭の両方で行えるように啓発していきたい。
	不登校やいじめのない学校づくり（生指部会）野村 【目標】職員間及び関係機関との連携によるきめ細かい指導・支援 【指標】組織的な対応と情報の共有を徹底する。児童アンケート６「いじめはどんな理由があってもしてはいけない」と考える児童100%。児童アンケート７「いじめを見たり聞いたりした時に，やめるように言ったり，誰かに伝えたりすることができますか。」と考える児童が80%以上。	B	○今年度発覚したいじめについては，該当児童と担任で話し合い，すばやい対応を心がけ，職員との共通理解を図った。職員会議や打ち合わせで情報交流も行っている。 ○学期に１回いじめアンケートを実施し，児童の様子を把握することに努め，気になる児童について対応した。スクールライフサポーターと連携し，不登校（傾向）児童の対応にあたっている。 児童アンケート６は，９８%，児童アンケート７は，９４%という達成状況だった。 ▲アンケート６の「いじめはどのような理由があってもしてはいけない」と考える児童が１００%となっていたのは，６年生だけであり，どの学年も１００%になるよう指導が必要である。 ・いじめ事案に出合った際に，止めるよう直接伝えたり，誰かに伝えたりできるような子どもたちを育てていく必要がある。いじめの未然防止に向け，職員が意思統一をして指導に当たることは勿論，いじめの早期発見，いじめ発覚後の事実確認，及び全校で統一した指導方針の決定をすばやく行えるような体制のもと、複数の職員での対応を今後も行っていく。	・問題の早期発見，解決，情報の共有化等の体制が整っている。 ・達成状況がＢなのは，逆説的であるが正直な実態を出している。回答慣れして極端に良い数字になるより，潜在化しないよう，子や保護者とのアンテナを張って取り組んでほしい。 ・いじめる側，される側とも，言い出せなかったり周りが気付かなかったり，児童同士や保護者の間でたいへんだろうが，連携をとって早く芽をつんでいる。潜在化しないよう啓発を進めてほしい。 ・子どもも周りへの心遣い（心配をかけたくない，加害者がどうなるか）からいじめを我慢して一人で悩み，先生や親に言わない事も多い。学校側のいじめの把握は難しいだろうが，発見できれば，先生の対応により多くは解決にいたることができる。 ・不登校の児童についてはどうか。一人ひとりの人権を考えて対応してほしい。無理やり登校を勧めるというより，その子の話をよく聞いて解決をしていくことを願う。	・いじめの未然防止に向け，職員が意思統一をして指導に当たることは勿論，いじめの早期発見，いじめ発覚後の事実確認，及び全校で統一した指導方針の決定をすばやく行えるような体制のもと、複数の職員での対応を今後も行っていく。 ・不登校傾向にある児童や保護者との連携を重ね，寄り添いながら解決に向かうように努力していきたい。

(3)一人ひとりに応じた指導・支援の体制づくり	**個に応じた授業づくりや支援の工夫**（研修部会）新開 【目標】個の理解を深め，それに応じた教材や支援の工夫 【指標】研修会で，課題をもつ子の困り感を共有したり，支援方法の研修会を行ったりする。外部機関と連携し，支援方法を校内で還流していく。	A	○各学級で見続けていく児童を定め,その子を取り巻く仲間を育てていく活動を大事にし,定期的に人権レポートとしてまとめ，交流することで教職員の共通理解を図った。 ○困り感が感じられたり現状に応じた支援方法を見出したりする場合には,スクールカウンセラーへの相談の場を大切にし，児童と保護者だけでなく,教師も様々なアドバイスを受けながら支援を進めた。 ○発達検査結果の見方やそれに応じた支援方法を学ぶための研修会を実施し,改めて児童の様子と重ねて深く考え,深く知ることができた。	・支援学級の備品や設備がきちんとそろっている。 ・児童への配慮，支援が工夫されている。 ・発達障害の検査や支援がなされ，保護者の相談の場が設けられているということで，これからも児童が健やかに成長できるよう丁寧に支援をしていってほしい。気づいていない，認めたくないなど悩みがある人もいると思う。 ・スクールカウンセラーと情報共有していてよい。 ・子どもの人権を守りつつ，コミュニケーションをとって諸問題を解決していってほしい。	・今後も学級での人権意識等を高める取組を大切にし,仲間一人ひとりを思いやることのできる児童を育てていく。 ・児童の普段の姿や発達検査結果等を参考にしながら,児童一人ひとりの困り感に寄り添い,支援方法の検討・相談を進めていく。また,保護者との連携も大切にしていく。 ・支援の実践方法等を詳しく学ぶことのできる研修の場を設け,生かしていく。
	組織的・継続的な特別支援教育（特別支援教育担当）新開・大飼・市川 【目標】個に応じた支援の方向性の共有・継続 【指標】支援が必要と思われる児童の情報交流会を月に１回実施する。また，必要に応じて随時校内支援委員会やケース会議を開催する。該当児童の支援計画作成を100%とする。	A	○支援が必要と思われる児童の報告を月に1回実施し，実態を把握した。 ○学校生活の中での該当児童の様子や行動について学校全体で見守り，改善策を考えていくことができた。 ○スクールカウンセラーやその他の専門機関などとの連携を図ったり，それらの情報を共有できるようにしたりするなど，支援体制を検討しながら進めた。 ○支援計画は１００％作成された。	・特別支援学級への施設面への対策等できている。 ・支援の共有化が行われている。 ・特別支援について進学など関連機関と連携がとれている。（複数） ・コロナ前に行っていた杉の子特別支援学校と連携した交流・支援を続けてほしい。（今年度は映像で交流を行いました。） ・一人より多数の知識や専門性を取り入れ，先生の負担を減らしていくことも大切。	・今後も各担任及び他の教職員が気付いた児童の様子を定期定期に報告し,情報共有を図ることで,学校として児童や保護者に適切な対応ができるようにしていく。 ・スクールカウンセラーや他の専門機関との連携を大切にし,専門的なアドバイスも取り入れながら進めることで,児童や保護者の困り感を減らしていけるよう努める。 ・コロナが収束したら以前のように杉の子特別支援学校との連携を大切にし,収束が難しいようであっても共に方策を相談しながら交流することを大切にしていく。
(4)児童生徒理解を基盤とした生徒指導	**組織的で統一感をもった生徒指導**（生指部会）野村・新開 【目標】統一感をもった指導がなされるよう，情報共有を徹底する。 【指標】日ごろから，同じ学年の教員で情報共有ができているか。また，何か問題事象があった場合には，学年・学年部・担当者・関係者・管理職ですばやく情報共有ができたか。職員アンケート5～8において，肯定的な回答が80%以上	A	○教職員アンケートで，すべての項目で80%を達成することができていた。 ○どの項目も肯定的な回答が多かったが，ルールを破った際の指導で，関係者と情報共有をして組織的に対応することを今後も意識して取り組んでいく。 ○小さなことでも情報共有していくことで，組織的に動いていけるよう継続して取り組んでいく。	・授業中や休み時間，全校落ち着いた雰囲気を感じる。（複数） ・指導が統一してなされている。（複数） ・落ち着いているということは学力向上にもつながるので引き続き取り組みを行ってほしい。（多数）	・今後も子どもたちの様子を見守り，いいところを見つけては価値づけていきたい。また，よくない行動があれば，話をきき，関係者と情報共有をして組織的に対応することを意識して取り組んでいきたい。 ・小さなことでも情報共有していくことで，組織的に動いていけるよう継続して取り組んでいく。
	決まりを守り，人の気持ちを考えながら過ごすことができる学校（生徒指導）野村・新開 【目標】人の気持ちを考えながら行動することができる子どもの育成 【指標】児童・保護者アンケートにおいて，8「自分からあいさつができる」，9「時間を守る行動を意識している」，10「人の気持ちを考えて行動することができる」割合が80%以上。	A	○児童アンケート８～１０の項目すべてで，８０％を超える結果となった。 8「自分からあいさつができる」83% 9「時間を守る行動を意識している」92% 10「人の気持ちを考えて行動することができる」89% ○あいさつは，学年に応じてばらける傾向にあり，あいさつの必要性を再度伝えて，あいさつが当たり前に飛び交う活気のある学校にしていきたい。時間を守るでは，100%守れた学年もあるように，どの学年も時間を守る意識が高まった。人の気持ちを考えるでは，児童一人ひとりが，周りの人の気持ちを考えながら学校生活を過ごす様子が増えてきていることが感じられる。今後も、学校全体で統一した指導を行っていく。	・通学の見守りをしていて，大きな声であいさつし，晴れの日は2列，雨の日は1列でうまく並んで登校している。 ・学校へ行くと，明るく元気に挨拶ができており，うれしく思う。指導の効果が出ている。（複数） ・参観や通学の様子からも落ち着いていてよい。 ・登校時のあいさつは少ない。声をかけても高学年が２～３人だけ返し，3回声をかけても見るだけで誰も返事をしない登校団があった。「あいさつが自分からできる」は８０％よりもう少し低いように思う。 ・学校のきまり，あいさつの励行，時間守るがきちんとできる子どもの育成を望む。	・知っている先生や友達にだけあいさつをするのではなく，地域の方や外部の方などにもあいさつができるように努めていきたい。そのために，あいさつの必要性を再度伝えていく。児童主体で行っているあいさつ運動から，教職員も元気よくあいさつできる雰囲気にして，あいさつが当たり前に飛び交う活気のある学校にしたい。 ・児童一人ひとりが，周りの人の気持ちを考えながら学校生活を過ごす様子が増えるよう，今後も学校全体で統一した指導を行っていく。
(5)安全で安心な学びの場づくり	**安全教育**（安全指導担当）山崎 【目標】主体的に安全を守ろうとする子どもの育成 【指標】年3回避難訓練を実施し，安全な学校生活を過ごすために，自分で工夫をしたり，訓練に積極的に取り組んだりする児童が90%以上。	B	○安全な学校生活を過ごすために，自分で工夫をしたり，訓練に積極的に取り組んだりする児童が90%で,当初の目標を概ね達成できた。 ▲児童アンケートの２項目の「地震や火事，洪水などの災害に備え，おうちで話し合ったり，地域の様子を調べたりしていますか。」での達成率では,50%を満たしていない。 ・学校で行える訓練は,被災を想定した訓練に限定されてしまうが,今後「防災教育」といった視点にも重点を置き,放課後や家で被災した時についても考えていけるよう,取り組みを進めていく必要性がある。	・避難訓練も確実に実施されている。 ・南海トラフも心配なので，防災教育を進めてほしい。（複数） ・横断歩道で車が停止することが増えてきたが，歩行者も気を付けなくてはならない。 ・加佐登は高台のため水害の心配が少なく，災害は地震だけという認識のため５０％という数字は納得する。 ・加佐登のハザードマップなどから危険個所を調査し，改善点は提起してほしい。	・避難訓練時での放送やJアラートのサイレンに合わせて、子ども達は躊躇なく行動できるようになってきている。今後も定期的に避難訓練等を実施していきながら、子ども達が着実に避難行動を身につけていけたらと考える。 ・更に、様々な状況時に応じて行動できるように、防災教育を今後も進めていく必要がある。防災ノート等を活用しながら、具体的な場面をイメージし、話し合い活動を取り入れながら、防災意識の高揚を図っていきたい。
	保護者・地域と連携した安全安心対策（管理職） 【目標】地域との連携体制の構築 【指標】学校運営協議会，まちづくり協議会,自治会等，地域へ学校からの情報をメール配信で発信して情報共有を行う。	A	○新型コロナウイルス感染拡大により，ボランティア活動を計画通り実施することが難しかったが、地域の見守りボランティアの方にメール登録をしてもらい、毎日の下校時刻や緊急時の対応をメール配信をして知らせた。また毎朝、見守りボランティアの方々と情報交換を行い安全確保をすることができた。 ○危険個所への対応や学校周辺道路への防犯カメラの設置などを地域やPTAと意見交換を行いながら進めた。	・登校に付き添ってくださるボランティアの方が多く，ありがたい。 ・ボランティアとの連携効果が表れている。 ・防犯カメラが設置されたのは，学校，ＰＴＡ，地域活動のまちづくり協議会防犯部の間で連携を図り地域一体となった結果で犯罪抑止にもなり良い安全対策となった。（多数） ・ドライバーにも様々な人がいることを子どもにも知ってもらい安全意識を高めてほしい。	・今年度のように、情報を共有し、課題となったことについては協議することを大切にして連携していく。
(6)学校運営協議会を中心としたコニュニティ・スクールの推進	**学校運営協議会での協働に基づく改善**（管理職） 【目標】協議内容の職員・保護者・地域への発信と具体的な取組の共有 【指標】学校運営協議会各回で話し合われた内容を職員にも周知し，「学校運営協議会だより」を学校内外に発行する。職員への周知率100%、保護者の周知率80%以上とする。	B	○学校運営協議会やその活動の周知率は，保護者はR2：51.6%→R3：52.3%、教職員は100%。 ・学校運営協議会だよりを毎回発行しており会議は周知されつつあるが、活動内容はまだ十分に伝わっていない。 ▲新型コロナウイルス感染拡大により，学校の年間計画を大きく見直すこととなり，昨年度より助言をいただいた学校運営協議会での協議に基づく改善活動は十分だったとは言えない。	・学校運営協議会の認知度が50%以上あるということは，高い方だと思う。（複数） ・ＰＴＡと比べ活動内容が分かりづらいと思うがそれでも５０％以上より保護者の方がしっかり意識をもっている。 ・目的，活動内容の周知を引き続き行っていく。 ・コミュニティスクールが理解できていなかったが，研修で理解できた。学校に目を向ける必要がある。 ・学校からの報告や連絡が中心となっていたので，協議を活かして具体的な活動が行われることが理想。 ・学校だより等で情報発信しているものの運営協議会の役割がまだ周知されていない。 ・コロナ感染拡大で活動に制限があり，残念。	・学校運営協議会では学校からの報告だけでなく協議に基づく活動となるようにしていく。 ・コミュニティスクールの役割や協議の内容を通信等で知らせ、保護者や地域へ啓発を行いながら認知度を高めていく。
	地域の教育力の活用（管理職） 【目標】学校ボランティアの活用の推進 【指標】児童アンケート3において、「学習意欲の高まり」があると答える児童の割合を80%以上とする。	B	新型コロナウイルス感染拡大により，学習ボランティア活動を計画通りに実施することが難しかった。 ・図書読み聞かせボランティアによる読みかせ7日間延べ40クラス ・実習補助として学習ボランティアを5回活用 ○学習ボランティアとして活用ができなかったため、アンケートを「学習意欲の高まり」から「読み聞かせによる読書への関心の広がり」に変更した。広がりがあったと答えた児童は、81.2%。 ▲コロナ禍における学校ボランティアの活用のあり方についての検討が次年度への課題である。	・コロナ禍でのボランティアの方の活動に感謝している。（複数） ・ボランティア対応では，コロナ対応で児童の好奇心を高める機会が削がれながらも，先生たちの学習意欲を高めるための工夫がみられた。 ・コロナ禍でボランティアの方に活躍してもらえなかった。コロナ禍でのボランティアのあり方の検討が必要。 ・読み聞かせ，丸付け，ＩＣＴ，英語などジャンルを広げて募集。 ・地域にたくさん人材はいるので，積極的にＰＲをしてボランティア人材の発掘と確保をしていくとよい。	・ICTや英語などジャンルを広めてボランティアを募集していく。 ・新入児童の保護者にもボランティアの募集について積極的に声をかけて学校の教育活動に関心を持ってもらう。
(7)教職員の働きやすい労働環境づくり	**総勤務時間の縮減**（管理職・教務） 【目標】業務の効率化 【指標】時間外労働を全員が月平均30時間以内とする。月2回の定時退校日を設置し、定時退校を行う。（定時退校率90%以上）。放課後に開催した１時間以内の会議の割合を88%以上とする。	B	○11月までの平均時間外労働時間　R2:23.7h→R3:22.9h（前年度比－0.8h） ○定時退校日の定時退校率R2:61.9%→R3:98.7%（前年度比＋36.8%） ・職員全員で意識して取り組み、月2回の定時退校率が上がった。臨時休校やオンライン学習等で学校行事の変更及び2学期への行事の集中があったが、時間外労働時間は若干縮小した。 ▲放課後会議60分以内終了率　R2：97.8%→R3：61.3%(前年度比＋35.5%) ・放課後会議60分以内終了に関しては、対象とする会議の基準を明確にして推移をみる必要がある。	・時間外の対応に留守番電話の設置は，働き方改革としてよい。 ・一つ一つ点検して働き方改革を進めていく。 ・教育という仕事は時間内に片付かないこともあり，時間外になりがちで，教育現場の労働時間に解決策は難しいと思うが，少しずつでも良い方向に向かうとよい。 ・教育という仕事は生産現場の効率などとは全く異なるが，会議の効率的な運営など意識的に点検して実践しているのでよい。 ・職員の待遇は厳しいと思うので問題意識をもって改善に努力していく。 ・時間外労働は減っているのに，会議の時間はのびているということか。 ・会議は内容と進め方について何が課題かの検討がいる。（複数）	・職員の勤務時間や留守番電話の設定時間を保護者・地域に周知する。 ・放課後会議６０分以内終了率を経年で比較できるように、対象となる会議を明確にし、会議終了の時間設定を行っていく。 ・勤務時間縮減のためのICTの活用法を模索していく。